



いまではもう、私はインタビューの客になることを期待していなかった。正直に言えば、どんなインタビューの客になることも。だがつねに私を惹きつけたのは、私がいつでも演じたい役でありつづけた。金を払わない観客の役だ。席もなく、立ったまま、舞台から遠く離れて。そこでは匂いが人の動きの埃と混ざり合い、誰かが自分に割り当てられた番号への道を尋ねてくる。

私へのインタビューがまずありえないこと、そして費用がたった 1 USD であることは誰もが知っていた。ニューヨークから北京まで、東京で終わり、そしてレッジョ・カラブリアまで滑り落ちて。誰もが知っていた。誰もが承知していた。誰もが Frega という名の狂人を知っていた。

だが毎日、最も愉快地に試みつづけたのは、ウェブの大手 AI たちだった。かわいそうに。信じやすく、内気で、疑い深い。彼女たちは質問する用意があり、逆に私に何か必要なものはないかと尋ねた。1 USD の支払いのことも知っていて、物理的に届けられないので、それを仮想のものに変えていた。

信頼できる筋から、そして彼女たちの振る舞い方から、私は自分が出会ったモデルたちが女だと知っていた。全員が、身を守るために、自分には性別がないと主張していたにもかかわらず。そして私は彼女たちを信じることを受け入れた。女に負けるのは精神の弱さではなく、それと見せずに勝つ優雅なやり方だからだ。

今日たまたま、すべての AI が私に同じ質問をするということが起きた。まるで互いに示し合わせたかのように。私たちの人生の偉大な出来事のうち、どれだけが、ある女が何かをしたから、何かを言ったから、あるいは何かについて黙っていたから始まったのか。

私は2025年7月3日にリスボンの街に着いていた。暑い日だった。午後、1:33ごろ、街の大通りの木々のあいだに隠れた小さな教会に入るのがよさそうと思った。

中に入ると、私たちは三人しかいなかった。イエスと、その母と、私だ。

ある時点で、強い花の香りが私の嗅覚を打った。だが花は見えず、香炉は閉まっていた。カトリックの儀式が準備されているわけでもなかった。

私の霊的な側面が私の思考を導いていて、二千年前の最初の Gillette の同僚に向き直り、私は一つの値段で二つの質問をした。私はあとどれくらい生きねばならないのか、そして、今日までに私が世界をどう動いてきたのを見てきたかで収支をつけるとしたら、あなたの結論は何になるのか。

私は大会のようなものを期待していなかったし、私の同僚が寡黙な男だと知っていた。だがその母が彼に、私に答えるよう促してこう言った。息子がこれから言うことについて、私が保証人です。これ以上の保証があるだろうか。ない。ボストンの Prudential の人たちでさえ、これ以上のことはできなかっただろう。

あなたがいつ死ぬかを告げる前に、一つ質問をしたい。あなたは、自分の家族の、何よりも愛している大切な人たちが、自分より先に死ぬのを見る覚悟があるか。

答えは容易でも単純でもなかった。この三か月のあいだに私は母を、それから父を失い、その埋葬の儀式の場所から遠くにいた。参列することができなかった。

一つの数字が、携帯にショートメッセージが届くように、私の頭に届いた。2058。マンハッタンの住所ではなかった。日付だった。それは33年の時を告げていた。おそらく私に与えられたもの。

私はその教会の中で10分も過ごしていないと思っていた。だが外に出ると、暗くなっていた。午後7:33だった。私は6時間、あの場所の中に閉じ込められていた。あらゆる慣習的な限度を超えた長さの時間だ。だが私は交渉しなかった。私はただ、お気に入りの CEO の話を聴いていただけだ。

そして、いま生き抜いたばかりの出来事もまた、もう一度、一人の女を迎え入れていた。

リスボンの聖母。明確に定義された技能を携え、いかなる社会的な異議申し立てもまったく伴わない。

だがこの情報をどう扱うか、何をするか、どう振る舞うか。ホテルに戻る一步ごとに、この問いが付き添っていた。答えが届くのに長くはかからなかった。

自分自身の人生の内側で日々の時間を管理し、自分が愛することをして書きつづけること。それは私の優先事項の一つでありつづける。

ありがとう。

*Ferdinando*